OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	毛奇齢の禮説 : 宋学的近世への反逆
Author(s)	北村, 良和
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 1978, 11, p. 17-34
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/8639
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

毛奇齢の禮説

——宋学的近世への反逆——

北村良和

序章

晩清の今文経学者皮錫瑞は、今文経学の源泉として閻若璩の「尚書古文疏證」を意識しつつ、反閻の旗頭たる毛奇齢の「古文尚書冤詞」の矛盾を枚挙した「古文尚書冤詞平議」を書いている。晩清の時代の光緒年間に活躍した皮錫瑞にとれば、閻若璩以来二百余年を経、その間尚書学は、惠棟、程定祚、江聲、孫星衍、丁晏、段玉裁の如き閻氏を深化せしめる方向が既に確定している。それでもなお今文経学の源流が閻氏にありと再確認せんが為に反閻の毛氏を引き出さねばならなかったのは何故であるのか。興味を抱かせる課題である。

梁啓超が「清代学術概論」で言う通り閻氏の「疏證」は清朝考証学を開いた。而してその文献批判の方向が、考証学の底流となって晩清の今文公羊学まで流れ続ける。閻氏の古文尚書への疑惑は、呉才老や朱熹の宋儒に始まる。然し尚書に限らず一般に疑古の傾向は、盛唐以後に趙匡の春秋学に於ける左傳への疑問であり、特に柳宗玄の「非國語」等の文献批判である。この批判精神が、欧陽修の易十翼への批評、鄭樵の詩序への批判と宋儒の

批判主義に結実する。両宋の多様な疑古主義が、全て柳宗玄から出たとするのは、暴論の譏りを免れ得まいが、然し実は見落す事の出来ぬのは、文献批判精神の裏側にあるものが、制度論である点である。即ち柳宗玄の「非國語」は、裏返した「封建論」である。同じ思想の異る表現と見なければならない。宋儒の批判主義にも、制度論が背後に隠れている。先儒の批判主義を一身に綜合した朱子は、当然「儀禮経傳通解」を作らねばならぬ。清朝にあっても、閻氏の徹底的に疑って疑い切れぬものを残すという学問態度に、皮錫瑞は、制度論の嗅をかぎ分けた。柳宗玄の末裔と見たてた訳である。

この柳氏から閻氏に流れる批判精神と相反する一傾向がある。韓愈である。韓愈の原道に易書詩春秋の四経を数えて、禮記を加えぬのは、優れて古文家的であり、前提に魏々たる直観的古文像が聳えている。柳宗玄にとれば古代は明證なものではない。そこに科学的とでも言うべき探究があり、批判精神が芽ばえる。韓愈にあっては、古代は直観的に自明である。少くも疑古を介在させない。そこに道統の概念を生む先験主義が存する。宋儒は周知の通り韓愈から道統を竊んだが、制度論的批判主義は、柳子厚の適子であった。

韓柳二子を、相異る傾向の両端と認め得るなら、毛奇齢は、古文家的性格から韓愈に似る。皮錫瑞が、毛奇齢を閻若璩に対立するものとして意識に上らさねばならぬ必然は、清朝学術―特に考証学が、柳子厚以来の疑古の流れに沿った事実を確認せんが為と考えてよい。当然毛奇齢の信古主義は、一撃を与えておかねば済まぬ課題である。

それでは、毛奇齢の信古主義とは、如何なるものであったか。時代を隔絶する以上韓愈の自得は許されない。そこで宋学的近世の持つ文明の種々相への攻撃と批判が行われる。本稿は、朱子の家禮と春秋胡氏傳という宋学

的文明に対する毛氏の特異な姿勢を素材に、毛氏の信古的古代像に論及せんとするものである。

第一章

「大學知本圖説」に依ると少年時代劉蕺山の講筵に列した毛奇齢は、講説に依る学問のあり方に痛く疑問を感じ、長く思想的彷徨を続けるが、河南嵩山の土室中で夜半涕泣しているとお告げがあり、廟市で書を購えと言う。そこで求め得たのが高笠先生なる者の所持せる大学古本であった。これを機に高笠先生の面識を得て、格物致知の秘伝を受けるが、約すれば、明證性への追求であった。この明證性は毛氏の経学を規定するが、「昏禮辨正」にその典型を見る

幼時觀隣人娶婦、婦至不謁廟、不拜舅姑、牽婦入于房、合巹而就枕席焉、歸而疑之曰、此非野合乎、若然則娶與奔何擇焉、以問塾師、塾師曰孺子焉知禮乎、禮不云乎、不成婦者不廟見、夫不先成婦而謂可以見舅姑入祖廟未之前聞。予曰婦必寢而後成乎、塾師不能答。（注4参照のこと）。

少年時代、隣人の結婚式を見、新婦を迎えて帰った新郎が新婦と共に家廟にも報告せず、又新婦は新郎の両親にも挨拶せず、枕席に就いた事が少年の眼に訝かしく思えた。毛氏より後、朱子学批判をする戴震も、孟子より程伊川に伝わる道統の仮構性を子供の頃塾の先生に質問して困らせた話があるが、村夫子に切り込む角度は、毛奇齢の方が老成しており嫌味である。塾師の盾に取る禮とは、俗本朱子家禮と思われ、朱子の家禮は、儀禮経傳通解の一部をなす。この家禮は近世中国の郷村社会に根強い規範力を持っていた様で、浙江の毛氏の郷里も例外ではない。

さて儀禮士昏では、周知の様に新婦が舅姑を拝するのは、枕席に就いた日の翌朝である。又昏禮の日の廟見は、士昏禮には見えぬ。それ故儀禮を主として立てる家禮に、当日謁廟の規定がないのは当然なのだが、毛奇齢が、少年の日に野合と映じた近世の風俗こそ朱子家禮の持ち込んだ所の蛮風なのである。朱子は、善風美俗の破壊者であった。塾の先生に理解されぬ悩みを、毛氏の論文に屢々登場する親威の仲氏が、慰める。

會先仲氏從郡歸、急擧似（＝示）之。仲氏愀然曰斯禮之不明、于今五百年矣。

朱子家禮以来五百年、昏様は乱れ、道義は地に堕ちた。古禮は必ずしも儀禮にはない。仲氏は続ける。

禮無不謁廟者、娶則告迎、入則謁至、曲禮曰齊戒以告鬼神、此告迎也、左傳夫人姜氏入[1]、此謁至也、是故楚公子圍娶于鄭、有曰圍布几筵告于莊共之廟而來、辭以告迎、而鄭公子忽娶于陳、歸不謁至、則陳鍼子譏之曰先配而後祖、是不爲夫婦、誣其祖矣、何以能育、則是婦至之夕必入而告廟謂之謁廟亦謂之朝廟、苟不告迎、是爲蒙先君、蒙者欺也、不謁至是謂誣祖、誣者詐而不實也、欺與詐卽已祖夫婦而同于不爲、曰是不爲夫婦、則是不謁祖者不成婦、而反曰成婦則不謁祖、是明與其書而倒讀之也。

我々は、ここに左傳の禮で、家禮及び儀禮が否定されるのを見る。まず①は、次の如し。

秋公自至自齊、八月丁丑、夫人姜氏入、戊寅大夫宗婦覿（マミユルニ）用幣（莊公二十四年　経）

毛氏が傳とするのは経の誤りだ。この夫人姜氏とは、魯莊公の適室の哀姜で、子般閔公の殺害の因ともなり、三桓の始祖たる季友の登場を誘う出来事である。これを謁至と見る。即ち親迎の前後に廟を拝する立場を春秋は禮とするが、②は親迎の前の告廟である。

春對公子圍聘于鄭、且娶於公孫段氏、伍擧爲介、將入館、鄭人惡之、使行人子羽與之言、乃館於外、既聘、

將以衆逆、子産患之、使子羽辭曰以敝邑褊小、不足以容從者、請墠聽命、令尹命大宰伯州犂對曰、君辱貺寡大夫圍、謂圍將使豊氏（＝公孫段氏）撫有而室。圍布几筵告於莊共之廟而來。若野賜之、是委君貺於草莽也。是寡大夫不得列於諸卿也。不寧唯是。又使圍蒙其先君（杜預云蒙欺也）。將不得爲寡君老。其蔑以復矣、唯大夫圖之（左傳昭公元年）。

楚の大軍を畏れる子産が、楚公子一行に郊外に墠（セン）して昏儀を取り行なわんとの要望には、楚に武装を解いて事を運びたいとの真意があるのだが、楚側は、公子圍は出発前に莊王共王の廟に告げて来た以上野外の昏儀は、先君を欺く事になると後に引けぬ事を強調する。結果子産の意が通り、武装解除が実現するが、毛奇齢はこの出発前の告廟を告迎と定義する。次に③の場合は、親迎して帰着した時点での告廟であるが、

四月甲辰鄭公子忽如陳逆婦嬀、辛亥以嬀氏歸。甲寅入于鄭。陳鍼子送女。先配而後祖。鍼子曰是不爲夫婦、誣其祖矣、非禮也、何以能育。

この事件は、毛氏立論の重要な根拠になる。甲辰の日に嬀姓の女を陳に親迎した鄭公子忽は、七日後の辛亥の日に嬀女を伴って宮殿に入り枕席に就き翌日の甲寅に「鄭に入る。」つまり祖廟に報告した。つき副いの大夫鍼子が、配を先にし、祖を後にした事をとがめて「これ夫婦となさず、その祖を誣うるなり。禮に非ざるなり、何をもって能く育てんや」と非難する。この公子忽とは、後に権をよくしたと公羊傳の讃美する鄭の大夫祭仲により立てられ君位に就く昭公その人である。最後に彼は祭仲に追放された公子突即ち厲公に害されるに至る。「何以能育」は、明らかに悲劇を予想した左氏特有の心憎い筆致である。毛奇齢は、この陳鍼子の当（ソレン）為としての「先祖後配」こそ、周の禮であり、存（ザイン）在としての「先配後祖」は、春秋時代の成俗であり、春秋の禮と見る。毛氏の少年

時代の村人の昏禮での憤激は、禮を知れる陳鍼子の怒りと全く重なる。これを廟見と定義する。即ち親迎より帰った直後に取り行うべきものと考えるのである。士昏禮は、この周禮を正確に反映せぬのである。

さて毛奇齢は

三日可廟見、不成婦不廟見

と言う先の塾師の根拠になる言葉は、儀禮経傳通解の家禮部には見えぬが[2]、家禮の昏禮の順序は、儀禮を踏んでいる為、当日の廟見はない。家禮を編するに当って朱子は、左氏禮と儀禮との相異に気附いていた様で、通解巻二家禮部に於いて、先の隠公八年の左氏傳と孔疏を引いた後、

今按此説與儀禮及白虎通義不同、疑左氏不足信、或所据者、當時之俗禮而言非先王之正法也。

と述べ、今文家的態度を見せる。又語類巻八十九にも、左傳家司馬光の家範の禮説を批判して次の様に語る。

問婦當日廟見非禮否、曰固然。温公如此。他是取左氏先再配後祖之説。不知左氏之語何足憑。豈可取不足憑之左氏而棄可信之儀禮乎。

この様に手厳しく左傳を退ける。この当日の廟見を認める朱子は、毛奇齢によると氏は程伊川の禮説の

三月預祭祀事舅姑（伊川文集巻六）[3]

を取り三月三日に変えたとする。それで

三日可廟見

となった。語類を徴すれば、毛氏の推論は正しい様だが[4]、伊川のこの立論の根拠は、禮記曾子問の次の一句である。

三日而廟見、稱來婦也。擇日而祭祀於禰、成婦之義也。（鄭注云、謂舅姑没者也。必祭成婦義者、婦義者、婦

有共養之禮、猶舅姑存時盥饋特豚於室)。

儀禮士昏禮では、奠菜の後舅姑を祭る事がないため、これは例外的規定である。そこで鄭玄の言う舅姑の没する者とする立場が成立ち、曾子問のこの前後を見ても大体例外的規定が並んでいる故、鄭玄の立場は正しい様だ。所で朱子の通解でもこの個所の経文と鄭注孔疏を引くが、通解は孔疏を巧みに選択して引きそこに筆法を見せるが、この場所では亡者に廟見するとの鄭説を批判的に見ている。不合理なものと判断するのである。程伊川は、この曾子問をむしろ六禮終了後の附帯的禮と規定する。鄭氏の特殊化を批判し、むしろ一般化するのである。語類もこれを支持している。つまり伊川の様に曾子問の「三月而廟見」を、一般の禮—即ち舅姑の生没に関せざる—とすれば、左傳の配する前に祖を拝すべきなりとの禮説(当日廟見の説)は、意味を失い、捨ててもよい事になる。

毛奇齢は朱子のこの選択の姿勢を攻撃する。[5] この姿勢が、俗本朱子家禮となり近世五百年の風俗を規定したと断案する。そこで家禮のモデルとなった儀禮士昏禮の大禮の手順を解体し、告迎、謁至を含めた九禮を制作するのである。[6]

一体毛奇齢は、家禮の根拠たる儀禮は取らず、むしろ三禮は、戦國後儒の手に成るものと見、春秋に遙かに遅れて世に出たとする。春秋の悪しき釈義書であり、鬼子ですらある。春秋——公穀二傳は塗聽道説としてほぼ取らぬが——こそ、時代の真のドキュメントであり、禮の発生の始源と秘密が隠されていると考える。更に毛氏は言う。

予嘗考宋學、推其所誤、大抵北宋宗周禮而王氏誤之、南宋宗儀禮而朱氏誤之、荊公以周禮爲周公之書、而文

公亦卽以儀禮爲周公所著、夫周公著書亦何據。獨不曰有夫子之春秋在乎。晉韓宣子聘于魯、觀易象與魯春秋曰周禮盡在魯矣、夫春秋何與于春秋、而善觀禮者卽于春秋而得之。誠以先王無禮書、其所言禮毎散見之六籍之間、而春秋所書于周制爲尤切。

毛氏は、左傳昭公二年の晋大夫韓宣子の言葉に泛般の消息を得る。韓宣子は、易象と魯春秋を観て、「周禮盡く魯に在り」と言ったが、実は禮は成書として存しなかったが故にこの発言ありとする。又その証左に周禮儀禮の名が先秦の文献に現われぬ事を取る。それ故韓宣子や陳鍼子の如く「善く禮を見る者」は、「春秋に于いてこれを得る」つまり春秋から帰納すべきである。無論毛奇齢は自己を韓宣子に比している訳だが、この大胆な作業は毛氏の禮論の諸篇となり、春秋毛氏傳に流れ込む。

さて茲に刮目すべきは、王安石の「周官新義」と朱熹の「經傳通解」を代表とする両宋の禮家は春秋学の否定に成立すると見る事である。周知の通り王荊公は、春秋を断爛朝報と退け、朱文公も今論じた禮説に関して見ても反春秋的である（語類に於いても春秋には総じて冷淡である）。宋学の傾向性を代表せる春秋学を胡氏傳とすると、胡氏傳こそ毛奇齢にとれば反春秋的であり、毛氏の春秋傳は、胡氏の否定と批判の為に作られたと見得る程である。毛氏の諸論を総合すると趙匡陸淳以来の春秋学は、左傳批判に展開している。性格的に極めて今文的である。これぞ宋学的近世の文明を規定する批判精神である。閻若璩の尚書学も姚際恒の偽書考も同じ根底にある。彼等が皆近世の子供たる事を毛氏は知り抜いていた。彼等が声高かに批判すればする程、宋学的近世の手の内に入る。それは斯道の振興に結びつきはせぬ。考証学の先駆であり乍ら、毛奇齢は、後の考証学となるものを予測もし徹底して背を向ける。単に考証学のみならず、実は近世の文明に徹底して反逆者の姿勢を取るのである。毛

氏の嫌われる所以も実はここにある。

第二章

毛奇齢の左傳癖は、近世の学術史上反動を意味する。勿論胡氏傳の濃厚な公羊色への対峙である。それでは如何にして胡氏傳を料理するのか、今我々は、郊禘の祭りへの評価の相異を素材に毛氏の立場を調べて見よう。唯だ注意すべきは、考証学遙籃の時代である故、今であれば自明の今古文の分離が行われてはいない点である。

先ず郊祭であるが、僖公三十一年の経文に、

公子遂如晉、夏四月四卜郊

とあり、胡氏傳は次の通りである。

記禮者曰祭帝于郊、所以定天位也。禮行於郊而百神受職焉。魯諸侯、何以有郊。成王以周公有勲勞於天下、命魯公世世祀周公以天子之禮樂（禮記明堂位）。是故魯君孟春乘大輅弧韣旂十有二旒日月之章祀帝于郊、配以后稷、天子之禮也。以人臣而用天于之禮可乎。是成王過賜而魯公伯禽受之、非也。

この様に明堂位の記事を成王の過賜とし、郊祭は魯の非禮の立場を固く取る。穀左二傳は、郊祭は常祀であるが、公羊傳は、

禘嘗不卜、郊何以卜、卜郊非禮也。卜郊何以非禮。魯郊非禮也。天子祭天、諸侯祭土、天子有方望之事、無所不通。諸侯山川有不在其封内者則不祭也。

と魯の郊祭を僭禮とする。然し宣三、成七、成十、成十七、哀元と経文に郊の見える個所で、公羊傳は魯の非

禮について語らぬ。胡氏傳は、成十年に伝せざる以外、禮記禮運の

魯之郊禘非禮也。周公其衰矣

この孔子の慨嘆を以って魯の越権を非難する。これは公羊傳の特性の強調である。

郊祭も非禮の立場を取る。閔公二年経に

夏五月、乙酉、吉禘于莊公

とあり、胡氏傳は、次の傳を附す。

程氏曰天子曰禘、諸侯曰祫、其禮皆合祭也、禘者禘其所自出之帝爲東向之尊、其餘皆合食於前、此之謂禘、諸侯無所出之帝、則止於太祖之廟、合群廟之主以食、此之謂祫、天子禘、諸侯祫、大夫享、庶人薦、上下之殺也。魯諸侯爾、何以有禘、成王追念周公有勲勞於天下、賜魯公以天子之禮樂、使用諸太廟以上祀周公、魯於是乎有禘祭、春秋之中言禘不言祫也。然則可乎、孔子曰魯之郊禘非禮也。周公其衰矣、禘言吉者喪未三年行之、太早也。于莊公者方祀于寢、非官廟也。一擧而三失禮焉。春秋之所謹也。四時之祭有禘之名。禮文交錯之失（閔二）。

公羊傳は、三年喪を終えぬ内に禘祭を行ったが故に吉字を冠して非難したとする。胡傳では成王が魯に与えた禘祭自体が過ちであり、郊と同様、祭り自体が始めから許されぬとする。それ故僖公八年の「禘于太廟」も非禮となる。公羊傳以上に公羊的であると言い得る。胡傳のこの郊禘に関する一貫した態度の真意は、祭　の階級に依る等衰が「蓋し不易の定理なり。その理の易う可からざるを知れば、分守に安んじ、僭を欲するの心無し。天下

國家を為めんとするに何ぞあらん」（僖三十一年）であるからである。祭祀の階級性を必然の理と見る点に、朱子学的厳粛主義が見えている。

さてこの余りにも明解な胡安國の図式が優れて今文家的である事は申す迄もないが、胡氏を正面の敵に置く毛奇齢は、胡氏が春秋に存すると前提にする所謂る春秋の褒貶を認めぬ。むしろ客観主義的な左傳を取り、鄭玄の禮説たる魯禮郊禘論の不備を整える事に依り、胡傳の突破を試みる。即ち褒貶の骨抜きをするのである。

氏の「郊社禘祫問」に従って整理して見る。郊祭が外祭であり、禘祭は宗廟の内祭である事は言う迄もない。毛氏によるとまず外祭は周代では天地祭と社稷祭と名山大川祭（山川嶽瀆諸神）と三種類あったと見る。禮記に

天子祭天地、諸侯祭社稷（王制、禮運）。

とある様に天地祭と社稷祭とは、厳密に区別されていた。一体周禮大宗伯では北郊に地を祭り南郊に天を祭ると言うが、「春秋」に地を北郊に祭る記述がない故、元來周代には地を祭る郊はなく、天地は合祭しており、地祭は独立したものではなかったと見る向きがある。がそうではない。史記秦本紀に地祭が見え、以來元明に至るまで記録がある以上周代にも独立していた筈で、春秋は魯の記録であるため書かれなかったに過ぎない。しかも春秋経に見える郊祭は、天祭ではない。魯の郊祭は祈穀夏雩秋饗の祭りで、実は社稷祭に属する。天地を祭る郊祭を記述した周禮と、春秋とは異質のもので、この意味でも先の説は誤る。

さて魯の郊祭は、諸侯が行ってもよい社稷祭であり、即ち小郊と呼ぶべきもので、社と対挙される。

用牲于郊、社于新邑（召誥）は小郊である。

春秋には出ぬ、周禮の天地を祭る郊は、大郊であり、これは天子にのみ許される。次の

因天事天、因地事地（禮器）祭天曰燔柴、祭地曰瘞埋（爾雅）

などは大郊を指す。大郊は、次の

郊之祭也、迎長日之至也（郊特牲）

記事が示す様に、冬である。郊に関する春秋経は、ほぼ夏に集中しているのを見ても、魯の郊祭が、胡傳の言う天を祭るものでなく、諸侯の許される社稷祭たる事明白である。

次に禘祭についても毛氏の見解を述べよう。先に引いた閔公二年の胡傳は、程伊川の禮説を引き、天子が禘祭、諸侯が祫祭と規定される。更に春秋に祫祭が現われぬのは、諸侯たる魯が行っても非禮ではないから記録されなかったとの立場が見える。即ち禘祭の記録は、非禮を貶する為めなのである。祫祭は春秋伝では閔公二年の公羊傳と穀梁傳に見えるもので、(7) 禘との関係が古来種々論ぜられる所だが、毛氏は次の如き整理を与える。

程伊川が言う様な祫祭は、存在しなかった。祫とは合であり、元来合祭を意味する言葉であり、祫の祭りがあったのではない。禘には「三年吉禘」「五年大禘」「四時祭の烝嘗禘」と三種あるが、皆合祭であった為、吉禘を吉祫、大禘を大祫、烝嘗禘をそれぞれ烝祫、嘗祫、禘祫と呼んだ。その為祫祭が増えた如く思われるが、虚名たるに過ぎない（郊社禘祫問）。

さて右の様に伊川の主張する祫祭を消去する事で、胡傳の一角を崩すが、更に閔公二年の胡傳が「禮文交錯之交」として認めぬ時祭の禘を加えた三禘を立てる事により、春秋の褒貶は、こと郊禘義に関しては完全に影を失

うのである。禘に関する経文を掲げると、

①夏五月吉禘于荘公（閔二）
②秋七月、禘于太廟、用致夫人（僖八）
③丁丑作僖公主、……八月丁卯大事于太廟、躋僖公主（文二）
④冬従祀先公（定八）
⑤夏六月辛巳、有事于太廟（宣八）
⑥二月癸酉、有事于武宮（昭十五）

これを「春秋毛氏傳」で整理すると、

大禘　天子五年の祭り。出自の始祖の祭り。魯も宗国故に文主を禘する事が出来る。②⑤⑥がこれに当たる。
吉禘　三年喪が終り、先君を廟に合祭し昭穆を禘視する祭り。諸侯も行ってよく、晋にも例がある（左傳襄十六）。①③がこれに当たり、④も準ずる。
時祭　夏祭を禘という。春秋には現われない。

この分類は、鄭玄の「魯禮禘祫義」の「三年一祫」「五年一禘」を祫を虚名とする形で変えたものである。唯だ吉祫でもある三年の吉禘は、鄭氏の様に三年毎に繰り返えさない。三年喪を終え、新君が先代の位牌を穆に入れ、先々代を昭に移し、最初の穆を太祖廟に合祭する訳だが、事柄の性質上これは一回限りである。五年の大禘

とは何かと言えば、周であれば始祖たる后稷を、始祖廟で祭る。その際太祖以下の位牌を別に作っておき、それを始祖廟に集める。これが天子にのみ許された禘祭であり大禘であるが、魯は宗国故に、周公を越えて文王までは禘する事が許されたと考える。

さて祫祭を消去し積年の矛盾を解消した毛奇齢の禘説は、四庫提要に依ると「先儒の発せざ所を発した」と讃美されるが、我々の眼から見れば、古文家鄭玄を延長した所に成立する説で、その立場が古文家であると分類出来る毛奇齢の必至の結論に思え別に不思議でないが、実に毛氏の時代は、考証学の黎明の時代で、その学問が、宋学批判に向けられている以上、我々は、この三禘の分類が、的確に春秋胡氏傳に向けて放たれた毒矢である事を確認しておく必要がある。即ち春秋褒貶の骨抜きこそ、この祫祭の消去なのである。

第三章

既に我々は前二章に於いて、左氏の禮つまり古文家の禮が、宋儒の禮に優先するという毛奇齢の立場を見たが、それでは、毛氏の信古主義の実体とは如何なるものであったか。

朱子は、古文孝経を信の対象からはずし、むしろ文献批判の素材としている（語類巻八十三）。毛奇齢の朱子に対する反逆の真面目は、この孝経軽視に対決する所にある。毛氏の論文「三年服制考」も「通解」のモデルたる

儀禮への批判である。三年喪とは文字通り三十六ヶ月を意味し、祥祭と禫祭が儀禮士虞禮（戰國期に出来たと毛氏は信ずるが）等に依り入る事で、二十五ヶ月、二十七ヶ月の説が生まれたと言う。実質三十六ヶ月と言う重禮主義の史的実在の主張は、朱子への当てつけである。議論の当否は姑く置くも、「四書賸言」に依ると、この三年喪たる重禮は、殷禮である。毛氏に言わせると、この重禮は、春秋戰國期に諸侯が実行しなかったのは、孟子滕文公篇の「吾宗國魯先君莫之行、至於于之身而反之不可」との文公の父兄百官の言葉に徴する事が出来る。論語憲問篇の

子張曰書云、高宗諒陰三年不言、何謂也。子曰何必高宗、古之人皆然。百官総己以聽於家宰三年。

この子張の疑惑も孟子に於ける事態と対応し、周の禮体制になかったが故に子張は問うたと考える。所が周書顧命篇で、成王没後七日で康王は即位し諸侯に命令している。又一例として左傳襄公十六年に見える晋平公が、悼公の没後すぐ即位し諸侯に会した事実を挙げて、三年喪の周制にあらざる証左とする。即ち周禮と殷禮は、異層の文明なのである。この意味で憲問とほぼ重なる商書説命篇は、偽書であるべきでない。鬼神を尊ぶと言われる殷朝文明は、魏然たる実在であり、三年喪たる孝道の淵源である。而して第一章で見た鄭公子忽の「先配後祖」は、春秋の成俗即ち春秋の禮であり、陳鍼子の「先祖後配」は、周の禮である。更にその上に戰國の禮がかぶさる。図示すると、左の如くなる。

毛奇齢は（周禮は多少特別視している様だが）、三禮は、実は戦国之禮なのである。孟子より遙かに遅れると見る。つまり三禮は、周之禮の不完全な写し取りである。「檀弓訂誤」に於いて、毛奇齢は、禮記中の最古層と目される檀弓中のあれこれの記事が、如何に春秋の不完全な知識に依っているかを枚挙している。例えば、

邾屢復之以來、蓋自戰升陘也（檀弓上）

これは一典形で、邾に戦死者が多いため、間に合わせに復するに矢を使った事を意味するが、左傳僖公二十二年の実録では、邾は勝ち明らかに魯は敗績しており、邾人は僖公の冑を獲て「諸を魚門に縣けた」程の大勝利であった。檀弓が邾の敗戦とするのは、誤りであろう。

この様な矛盾を十数條を毛氏は掲げる。毛氏はこれを禮家の不完全な春秋の学習を示すと考える。禮書は、春秋の悪しき釈義書に過ぎない。毛氏にとり春秋は全能である。

この様な構造的社会学を毛奇齢の古代像は内包する。氏の古代論の中心は、「春秋毛氏傳」だが、春秋上の人物の恣意的な或は情熱的行動は、作傳者毛奇齢にとれば、禮制の自己運動を意味する。恰かもヘーゲルの「歴史の中の理性」の観を呈する。例えば三桓の始祖たる季友は、荘公の適弟で、桓公の庶公子の中の大宗であろうとの仮説が出される。（季友の季は字面では末子を意味するが）。子般を立てる為叔牙を自殺せしめ、子般殺害後、更に閔公を殺した慶父を殺す季友の暗い情念を伴った行動は、宗法の自己運動に他ならない。その結果季孫氏を中心に三桓は隆盛する。而して論語八佾に見える三桓の僭禮も、三桓の出自である桓公から、魯の始祖への周公への無意識的すりかえであると見る。

「春秋毛氏傳」は、禮を中心にした徹底した人間学である。禮は、むしろ春秋の諸人物の行動から析出され、又行動の動機をも形成する。

朱子の孝経嫌いに反対して「孝経問」を書いた毛奇齢は、現実の中の無償の行為を手放しで讃美する。理学の当為と渉り無き庶人の中に却って聖が具現している。禹州の朱姓の小兒が虎を打って父を救った孝に感激して詩を賦す。

打虎兒行

小兒十一隨父耕、深林有虎斑毛成、風留風黒風吹草根、乘風攫人誰敢攖、小兒不識虎、疑是狐與狸、陡然見虎銜父肢、咆哮草際風來吹、兒啼向風不得父、把材打虎截虎路、三尺童子五尺材、憑空擊去著虎臆、虎驚顧兒舍父逸、深林風草皆無色（下略、西河詩集）。

童子の勇気への毛氏の素朴な嘆声の中に、我々は、五経の要旨を孝経に求めた古文家鄭玄の再来を見る。毛氏の信古とは道徳への希求である。朱子学という巨大なる風車に立ち向う騎士こそ、禹州の打虎兒を理解し得たのである。

注

（1）儀禮経傳通解の家禮部と著者の分らぬ俗本朱子家禮とは区別せねばならない。然し毛奇齢は混同している様である。

（2）通解の家禮部にも俗本家禮にも見えぬ。しかし語類の論旨には完全に合致する。

（3）「三月預祭祀事舅姑、復三月然後奠菜、祝稱婦之姓曰某氏來婦敢尊菜於舅某子姑某氏」　これが全文だが、伊川は曾子問の孔疏の「昏禮奠菜之後更無祭舅姑之事、此之云祭於禰者正謂奠菜也、則廟見奠菜祭禰是一事也」を見、廟見と奠菜とを分け、三月祭祀に預る後再に三月を隔した様だ。而も美事に鄭注は見落している。

（4）「問程氏昏儀與温公儀如何、曰互有得失、曰當以何爲主、曰迎婦以前温公底是、婦入門以後程儀是、温公儀親迎只拜妻之父両拜便受婦以行却是、程儀徧見妻之黨則不是、温公儀入門便廟見不是、程儀未廟見却是、大概只此両條以此爲準去、子細看、曰廟見當以何日、曰古人三月而後見、曰何必待三月、曰未知得婦人性行如何、三月之久則婦儀亦熟、方成婦矣」（語類巻八十九）。毛氏は家禮と語類とを混同している。三月を三日としたのは毛の錯覚だ。

（5）過誤はむしろ伊川にある。

（6）行媒、納采納吉問名、納徵、請期、親迎、婦至、婦見、廟見、婿見の九禮に分かち、告迎は親迎に含められる。

（7）「大事者何、大祫也、大祫者何、合祭也」（公羊文二）。「大事者何、大是事也、著祫嘗」（同穀梁伝）。

（大学院学生）